

大学生のラジオ番組制作のプロセスが キャリア形成に与える作用 ～ラジオゼミの参与観察から

都築 美代子

本研究では、大学生のラジオ番組制作ゼミにおいて、約半年間の生放送番組の制作がどのようなプロセスで進むのかを整理し、獲得する「スキル」や「気づき」「学び」などを質的分析によって明らかにし、幾つかのキャリア理論を用いてキャリア形成に与える影響について考察する。その上で、体験型のキャリア教育への効果的な活用法を提案するものである。

前身となる研究ノート(坂田, 都築, 2020)では、キャリア教育を職業的観点から捉え、経済産業省の社会人基礎力をベースにしたアンケート調査を中心に考察したが、本研究では、ラジオ番組制作を経験した大学生たちに、卒業して半年後、社会人となった後にインタビュー調査を実施した。在学中の参与観察とあわせて、半構造化面接のインタビューデータを用いて、修正版グラウンテッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)で分析を行った。ラジオ番組制作のプロセスから、大学生たちが何を感じ、何を学び、それが社会でどのように活かされていくのかを明らかにし、ラジオ番組制作による体験型のキャリア教育について、活用の可能性について研究するものである。

1 章では、問いの設定において、新型コロナウイルスの影響で企業活動や学校などの学びにおいて急速な変化を遂げ、IT 分野では chatGPT などの AI の活用が飛躍的に進んでいる時代背景を鑑み、ラジオ番組制作の意義について提案した。加えて、筆者のラジオキャスターとしての経験が本研究の出発点となっていることから、その背景についても述べている。

2 章では、先行研究としてラジオ番組制作を教育に活用している事例を集めた。ラジオ番組制作とキャリア教育とを直接結びつけた研究は少なく、これまでの研究が継続的ではないことや、メディアリテラシーなどの分野でも研究例があるものの、既存の放送局の力を借りて行われている例が多く、長期的なラジオ番組制作が困難である現状を述べた。

3 章では、「なぜラジオ番組制作なのか」について、本研究に置いてのラジオと番組の定義や、コ

コロナ禍でラジオが身近になったこと、音声編集など技術の進歩や、テレビなどの原点がラジオにあり、基礎的なことを学びやすく、制作過程を一貫して体験できることなどラジオの利点を述べた。

4 章では、日本の大学におけるキャリア教育の現状と、本研究に適用が考えられるキャリア理論について、理論の概要と活用についての考えを述べた。

5 章では、筆者が 3 年 8 カ月に亘って参与観察を続けてきた、立命館大学産業社会学部のラジオ番組制作のゼミナールの概要と、制作されているラジオ番組や制作の方法について述べ、6 章では、その調査対象者や分析の方法についても記し、7 章では、前出の通り、2020 年度に 3 回生だったゼミの大学生を対象に、卒業後のインタビューをもとに、M-GTAを用いて分析し考察した。

8 章では、その分析と考察をもとに結論と課題を述べている。まず「多種多様な経験と出会い」に着目し、ラジオ番組制作の過程が、多くの経験や出会いができるような仕組みであることを論じている。キャリア教育の観点からは、多種多様な経験や出会いから、自己概念の発見に繋がることなどにも触れている。

また「点と点が繋がる体験」として、半年間という短いラジオ番組制作体験で得たものが、卒業して社会に出た半年後に生きていたことに着目し、体験型キャリア教育での「経験知」の獲得がスムーズに行われていることについて述べた。

次に「適度な自己効力感に獲得」については、アルバートバンデューラの理論を用いて、ラジオ番組制作の過程で得られる自己効力感のバランスが、どのような支援によって得られるのかについて述べた。

そして最後に、「公共」の「生放送」で行われているラジオ番組において、その2点が大きく作用していることについて、「聴覚空間のパノプティコン」と定義し、チームでより良いラジオ番組を作るため、目に見えないリスナーの存在を意識しつつ、能動的に番組制作に関わっていく様子を例えた。本章でも述べたが、聴覚空間のパノプティコンは、監獄のように暗く支配的なものではなく、「より良いものを制作して聴いてもらいたい」という思いが個々の中に育つことを意味する。やらせている状況ではなく、いかに自らの意思でラジオ番組制作に参加するかが大きな鍵となるのである。

つまり、ラジオ番組制作は、制作過程の自然な流れの中でキャリア形成に影響を与えるものである。尚且つラジオの定義を音声配信なども含めて幅広く捉えれば手軽であるため、キャリア教育への活用が比較的容易であると考え。今後は実社会で活用できるような仕組みづくりや、適宜プログラム化なども検討し、ラジオ番組制作の経験によって、多くの人が満足ゆくキャリアを築いていけるようサポートし、研究を続けていきたいと考えている。